

諏訪の御柱

Onbashira in Suwa

1K04B196-1

藤森 圭

指導教員

主査 寒川恒夫先生

副査 加藤清忠先生

緒言

長野県諏訪市には、干支の寅と申の年の4月から5月にかけて行われる諏訪大社の御柱祭がある。諏訪大社には上社と下社があり、諏訪湖の南側に上社、北側に下社がある。上社は本宮と前宮、下社は春宮と秋宮に分かれており、上社、下社ともに、それぞれ8本の樫の木の大木を山から伐り出し、曳行し、木落として社殿の四方に新たに御柱を建てるのが諏訪大社の御柱祭である。御柱祭は7年に一度寅申の干支に開催されている。

古代には、日本中で御柱祭が行われていたと言われており、出雲の「大黒柱」、伊勢の「心の御柱」、諏訪の「おんばしら」を日本三大御柱と言った。今でこそ三者三様であるが、はるかルーツをたどれば、やはり原型は諏訪の御柱にたどりつく。今回取り上げる御柱祭は、昔の形式を維持したまま現代でも継承されていると言われている。

今後、私がこの御柱祭を継承していく上で、これらを知ることが必要と考える。よって本論文において、御柱祭の歴史や内容を調べ紹介することを目的とする。

第一章 御柱の歴史

【1】由来

日本人は昔、自然に存在する山や水、海、木、岩などに神が宿っていると信仰し、古代人が神をまつるには2つの形があるとされてきた。1つは神を岩に出現させる岩座(いわくら)信仰という岩倉の地名を磐座に由来し、岩に神が降臨するという意味合いが込められている信仰と、もう1つは神霊の天下る木という意味を持つひもろぎ信仰である。信仰の拡大に伴い神社の設立も多くなり、以前は神社の中で神をまつる儀式が主流であったが、月日を重ねる毎に神社の周辺にある大きな木にしめ縄付けその木に神を宿し奉るひもろぎ信仰が主流化発展し、人々は森の中の大きな木を神まつりの社として神社の原形をつくった。

諏訪大社の木には、下社では春宮はスギ、秋宮ではイチイの神木があり、地鎮祭などで神官が中央に1本の青木を立て、天に向かって声をあげるあのきわめて自然なお祭りの形が御柱に通じると考えられている。

【2】御柱に関する意味

御柱に使う木は、明治以後モミの木が使われており、春宮、秋宮とも一の御柱が1番大きく、二、三、四となるにつれて、長さが5尺(1.5メートル)ずつ短くなってきた。御柱に使用される木は、上社では旧18ヶ村の代表により抽選で決められ、下社では明治以前

はやはり抽選で決めていたが、明治11年以降関係旧6市町村の申し合わせにより、山出し、里曳きの各市町村分担が内定している。

御柱年には家の新築、婚儀、葬儀などが縁起が悪いとされ、「御柱が済んでから」と先送りになる。また、昔は女人禁制で、女性は御柱に手も触れることができなかったが、戦後は老若男女、観光客も自由に参加できるようになった。

上社と下社の違いは、「ツノ」の有無であり、上社は男神で「ツノ」があるが、下社は女神で「ツノ」はない。

【3】御柱の用具

御柱の衣装には半天、腹かけ、股ひきが使われ、それは華やかな祭りの衣装ではなく、「作業着」である。しかし、時代の推移とともに祭りの観光化に伴い、次第に派手になってきた。

おんべは、檜を細長く削って、経木状にし、それを束ねて8角形の握りぼうの先にくくりつけたもので、木遣衆の必要品である。綱は、御柱の両側につけ曳行のために使用され、1本の御柱に2本の綱をつけ、御柱に向かって左側を男綱、右側が女綱と呼ばれている。御柱を動かす道具は綱と梃子の2つで、御柱の場合は原始からの丸太棒が使用される。

【4】御柱に奉仕する若衆の役割

御柱を曳行する際に、木やり衆、斧とり衆、元綱衆、梃子衆、追掛衆、曳子の人々がそれぞれの役割を果たす。

第二章 御柱祭の準備 ー祭りの主要行事ー

御柱祭の主な行事として御柱の見立て、抽選式、引き綱打ち、火入れ式、御柱伐採、御柱山出し祭、御柱里引き祭、建て御柱祭、式年遷座祭などであるが、なかでも御柱山出し祭及び里引き祭、建て御柱祭がこの祭りの圧巻である。

第三章 祭りを彩る

御柱祭を彩る催しものの中に「お騎馬」がある。その原型は徳川時代の大名行列とされ、特に諏訪藩は御柱祭警固のために騎馬行列を出したことが、現在に伝わっている。

まとめ

御柱祭に向けて、地元の人々は長い月日をかけて準備をする。御柱祭は、地元の人にすれば強制的に出るというより、御柱祭に出るということは義務のような存在となっている。

多くの人々によって支えられ伝えられてきた御柱祭の伝統を受け継いでいくことが、私達出身者の義務である。